

## キリスト道講演会 (奈良 第7回) 福音の原点

2015年3月28日 (奈良 春日野荘)

奥田 昌道

よき音信 無常観 地上の世界は有限 神の側からの呼びかけ 罪の意識 新約の世界――キリストの福音 恩恵と真理はイエス・キリストを通して 永遠の命を得ること 肉と霊 イエスの十字架 祈り

### ●よき音信

皆さん、よくおいでくださいました。奈良での講演会は第7回になりましたが、回を追うごとに中味を深くしていきたいという気持ちでおります。今日は「福音の原点」という題をかかげました。

「福音」というのは何でしょうか。「福音音信」ということなんです。

「何がよき音信なのか、誰にとつてよき音信なのか」

ということですが、この世のいろんな事柄で満足しきっている人にはあまりよき音信ではなさそうですね。必要ではないから。渴いている人、お腹のへっている人にとつては、おにぎりは美味しい、お水はおいしい。けれども、満腹したり、渴きを持たない方には、要らない。ですから、聖書の話というのは、そのようにして本当に必要だという人にとつては、とてもしみ込んでくるけれども、

「今、私は充分満ち足りていますから、何も要りません」

という人には響かない。これは仕方がない。たとえば、今日は太陽がいっぱいです。こんな日に懐中電灯を持つてうろうろしている人は居ません。でも、真つ暗闇の中に懐中電灯をつける、ロウソクの灯を一本とすると、とてもありがたいですね。そういうものなんです。では、我々の現実はどうなんですか。皆さん、もうすべてのことに満ち足りて、

「私は何も要りません」

という人は、聖書の扉を叩く必要もないし、叩きたくもないでしょう。けれども、自分でそうだと思いきこんでいる人も、

「本当にそうなの？ あなた、本当にそうなの？」

と聞いてみたら、案外そうでないということがあつてます。たとえば、突然、

「あなたは癌の疑いがあります」

という診断を受けた時に、

「ああ、そうですか。そんなものは想定内の範囲ですから、問題ないです」

と言えるような人はまず少ないでしょう。自分あるいは家族にそういうものが突きつけら



れた時には、やはり動揺するでしょ。それから、日本ではいろんな災害が起こります。これも想定外とか想定内とか言ってますけれども、とにかく、現実にはそういうものが起こってきて非常に悲惨な事態になる。新聞記事を見ましても、飛行機が墜落したりとか。

「全く私はそれらとは無縁で、たえず安泰あんたいです」

と言えるような人は実はいない。ただ気がつかない。呑のん気に構かまえているだけではないかと、そのようなことを思います。

私は今日は、聖書の中からたくさん引用して、レジュメをプリントしてきました。まず始めにここに引用してますのは、「ペテロの第一の手紙」です。ペテロはイエスの弟子でしたから、そんなに昔のことではない、せいぜい2千年程度前。その次に引用しました「詩篇」とか「伝道の書」とかは、今から3千年前の昔の話です。しかも、我々から遠く離れた一向こうからいうと、日本は極東といつて東の端に住んでいる民族が我々ですけれども――我々からみたらイスラエルは遠い所なんです。そういう所でしかも3千年ほど前にこんなことが語られ遺のこされているということが、私には非常に驚きでした。では、そういうものを味わいながら、プリントを見ていきましょう。

《Ⅰ 人間の現実、昔も今も、洋の東西を問わず、変わらない。》

東洋であろうが西洋であろうが中東であろうが、同じではないか。やはり人間だ。人間という共通項がある。そういうことを非常にこれを自分で書きながら思いました。パソコンで一字一字打っていく。これはいいですよ、確かめながらやりますから。読むだけならスーッと済んでしまうのが、一字一字確かめて――これは皆さんに渡すプリントだから誤りがあるといけない――読んで打っていますと、グーッと迫ってくるものがあります。

「<sup>24</sup>人は皆、草のようである。その栄えはすべての草花のようである。草は枯れ、

花は散る。<sup>25</sup>しかし、主のことは、とこしえに変わることはない。」(ペテロ

第一1：24～25 フランシスコ会訳聖書)

これは旧約聖書のイザヤ書(40：6～8)とか、詩篇(103：14～16)にも引用されています。次に詩篇の言葉を引用しました。

「<sup>4</sup>あなた(神)の目の前には、千年も、過ぎ去れば昨日きのうのごとく、夜の間のひ

と時のようです。<sup>5</sup>あなたは、人を大水のように流れ去らせられます。彼らは、

ひと夜の夢のごとく、あしたに萌え出る青草のようです。<sup>6</sup>あしたに萌え出て、

栄えるが、夕べには、しおれて枯れるのです。(中略)われらの年の尽きるのは、

ひと息のようです。<sup>10</sup>われらの齢よわひは70年にすぎません。あるいは健やかであ

っても80年でしょう。しかしその一生はただ、骨折りと悩みであって、その

過ぎゆくことは速く、われらは飛び去るのです。」(詩篇90：4～10 口語訳聖書)

「70年、80年」と書いてある。モーセは120歳まで生きたようです。

「アブラハムは175歳まで生きた」



と書いてありますけれども。この詩篇で

「われらの年齢は70年か80年だよ」

と言われると、「ああよく似ているなあ」と親近感を覚えます。昔の70年というのは、今だつたら3割増しくらいにしないではいけませんから、今の人だつたら

「我々の年齢は90年、100年にすぎない」

「いや、そんなに長くはないよ」

と言われるかもしれません。要するに、有限だということです。どんなに栄えていても、

「朝に紅顔ありて夕に白骨となる」<sup>あした こうがん ゆうべ</sup>

というような詩もありますね。そういうふう<sup>はかな</sup>に人の生涯というものはわからない。そういう儂さをここで訴えていると思います。

### ●無常観

次は「伝道の書」です。これは「ソロモンの箴言」<sup>しんげん</sup>とか「ソロモンの伝道の書」と言われていますが、誰が書いたかは別として、なかなか味のあることが書かれています。日本では「方丈記」などに書かれています。そういう無常観というものが漂っていますので、ちよつと読んでみます。

《<sup>2</sup>伝道者は言う、空の空、一切は空である。<sup>3</sup>日の下で人が労するすべての労苦は、その身に何の益があるか》（伝道1・2〜3）。

「<sup>18</sup>わたしは日の下で労したすべての労苦を憎んだ。わたしの後に来る人にこれを残さなければならぬからである。<sup>19</sup>そして、その人が知者であるか、または愚者であるかは、誰が知り得よう。そうであるのに、その人が、日の下でわたしが労し、かつ知恵を働かしてなしたすべての労苦をつかさどることになるのだ。これもまた空である。<sup>20</sup>それでわたしは振り返ってみて、日の下でわたしが労したすべての労苦について、望みを失った。<sup>21</sup>今ここに人があつて、知恵と知識と才能をもつて労しても、これがために労しない人に、すべてを残して、その所有とさせなければならぬのだ。これもまた空であつて、大いに悪い。<sup>22</sup>そもそも、人は日の下で労するすべての労苦と、その心づかいによつて何の得るところがあるか。<sup>23</sup>そのすべての日はただ憂いのみであつて、その業は苦しく、その心は夜の間も休まることがない。これもまた空である」  
（伝道2・18〜23）

「<sup>10</sup>金銭を好む者は金銭をもつて満足しない。富を好む者は富を得て満足しない。これもまた空である。<sup>11</sup>財産が増せば、これを食う者も増す。その持ち主は目にそれを見るだけで、何の益があるか。<sup>12</sup>働く者は食ふことが少なくても多くても、快く眠る。しかし飽き足りるほどの富は、彼に眠ることを許



でない。

これは気に入りましたよ、私は。働く者は一生懸命で働いて疲れ果てて夜ぐっすり休む。でもだいたい、富める人は働かない。だから、不眠症になったりするそうです。ここに、

「働く者は食糧が少なくても多くても、快く眠る。しかし飽き足りるほどの富は、彼に眠ることを許さない。」

と。富の管理方に悩んでしまう。その頃、銀行があつたかどうか知りません。どこで富を管理するか、隠すのか、それだけでもおちおちと眠れないでしょう。そして、

<sup>13</sup>わたしは日の下に悲しむべき悪のあるのを見た。すなわち、富はこれを蓄えるその持ち主に害を及ぼすことである。<sup>14</sup>またその富は不幸な出来事によって失せて行くことである。それで、その人が子をもうけても、彼の手には何も残らない。<sup>15</sup>彼は母の胎から出てきたように、すなわち裸で出てきたように「裸で」帰って行く。彼はその労苦によって得た何物をもその手に携え行くことができない。<sup>16</sup>人は全くその来たように、また去って行かなければならない。

これもまた悲しむべき悪である。風のために労する者に何の益があるか。<sup>17</sup>人は一生、暗闇と悲しみと多くの悩みと、病と、憤りの中にある」(伝道5・10〜17)》  
なんと悲しい現実でしょうか。でも、皆さん、これを笑えますか。多くの人がこういう苦しみの中に一生を送る。そういう人が多いのではないかと私は思うわけです。

「人は一生、暗闇と悲しみと、多くの悩みと、病と、憤りの中にある」

という。「病」まではまだわかる。「憤り」という。たとえば自分の運命をつらつら思ったら、「なんだ、俺の人生は!？」と、無性に腹を立てる。特に周りに金持ちが居たり、いろんな幸せな人が居たら、無性に腹が立つということではないでしょうか。

そこで、次はなかなか素晴らしいことが書かれています。

《<sup>9</sup>日の下で神から賜わったあなたの空なる命の日の間、あなたはその愛する妻と共に楽しく暮らすがい。これはあなたが世にあって受ける分、あなたが日の下で労する労苦によって得るものだからである。<sup>10</sup>すべて、あなたの手のなし得ることは、力を尽くしてなせ。あなたの行く陰府よみには、わざも、計略も、知識も、知恵もないからである。

即ち、今たまわつたこの生涯をできるだけ幸せに暮らしなさい。それが人間としての最上なことだと、こう言っているわけですね。

「あなたはその愛する妻と共に楽しく暮らすがい」

と、これが気に入った次第です。

「わたしは日の下を見たが、必ずしも速い者が競走に勝つのではなく、強い者が戦いに勝つでもない。」

これも面白い。必ずしも速い者が勝つのではない。強い者が勝つのではない。選抜高校野



球をやっていますけれども、あれは予想通りにいったら、試合する必要はない。ところが、強い強いと言われている者が必ずしも勝つわけではなく、弱い弱いと言われている者が負けるわけでもない。そういうことを目指して、皆さんはがんばっておられるわけです。

また、賢い者がパンを得るのでもなく、さとき者が富を得るのでもない。また知識ある者が恵みを得るのでもない。

「金策ばかりで右往左往する必要はありませんよ」

とちゃんとやってくれているわけです。しかし、その次の聖句はずっと心すべきことです。

しかし時と災難はすべての人に臨む。<sup>12</sup>人はその時を知らない。魚が災いの網にかかり、鳥が罾<sup>わな</sup>にかかるとように、人の子らも災いの時が突然彼らに臨む時、それにかかるのである」(伝道9・9〜12)》

これは4年前の3月11日「東日本大震災2011/3/11」を思い出していただければ、皆さん、なるほどそうだと。善人も悪人も、金持ちも貧乏人も、何もかもいつしよくたに全部、あの津波によって洗い流されてしまった。私はあの事態を非常にショックに思いました。と同時に、やはり聖書の中に深く帰りたいという思いがいたしました。つまり、

「何がきても、それによって失われたいものを求めなければならぬ。地上のものは全部いつかは終わりがきます。そしていつそれが流されてしまいかかわからない。しかし、そんな天変地異が起ころうとも、びくともしないものをしっかりと持ち持たなければ、我々の人生は本当の人生とはいえない。それをもたらししてくれるものは、神さま以外にない」

と。私はそう思うんですね。

### ●地上の世界は有限

そういったことをまた以下のところでもいろいろ見ていきたいと思います。

《Ⅱ 地上の世界(精神の世界も含めて)は有限であり、永遠なるものではない。我らの生命もまた、有限である。死をもって、すべてが終るとすれば、先の「伝道の書」の嘆きのごとく、まことに儂<sup>はかな</sup>いものである。我々は、自身の中から「永遠の生命」(地上の生命を超えて永遠に生き続ける命)を創り出すことはできない。それでいて、我々の内なる(隠れた)願い(欲求)は「永遠なるもの」「地上の生命の終焉<sup>しゆうえん</sup>とともに終わることのないもの」を求めている。人は、それを遺族や彼を慕う人々の「追憶」の中に生き続けると言い、心の中に生き続けるのだと言う。でも、亡くなった人自身は、どうなのか。完全に「無」なのか。その人は、「自分の生命は、命は、終わるけれど、残された人の追憶の中に、心の中に残るから、それでよい」として、老後を明るく、生き生きと生きられるのか。完全に「ゼロ」「無」なら、慰霊祭を行ったり、黙祷を捧げたりすることは、偽りではないか。》



皆さん、慰霊祭をやられます。事故があったら、花輪や花束を捧げます。何か人間は単にこの地上の命が終わったら、それで完全にゼロ、物質になつてしまふとは思っていない。何かそこに何かが残っているはずだと。それを人は「霊」というかも、「魂」というかも知れません。人間は物質的なものですけれども、それがなくなつてもまだ残る何かを持つているはずだと。その何かは誰もわからない。しかし、何かはあるだろう。だから、慰めのための祈りを捧げたり、追悼の会を持つたり、いろんなことをやって、

「何かわからないけれども、その人は絶対にゼロになつていない。どこかで、霊として生きていくかもしれない。それが天国なのか地獄なのか、どこなのかそれはわからない。けれども、何かあるはずだ。その方に祈りを捧げましょう、その方が安らかであるように祈りましょう」

と。こういう気持ちというのはごく自然な人間の気持ちで、全世界どこでも通用する気持ちだと思います。

《先の、「伝道の書」には、

「<sup>10</sup>わたしは、神が人の子らに与えて、骨折らせられる仕事を見た。<sup>11</sup>神のなされることは皆その時になつて美しい。神はまた、人の心に永遠を思う思いを授けられた。それでもなお、人は、神のなされる業<sup>わざ</sup>を初めから終わらまいで見極めることはできない。」（伝道3・10～11）とある。》

「人の心に永遠を思う思いを授けられた」

という。神さまがもしも、永遠を思う思いを人に授けられたら、それは

「永遠なるものが必ずある」

ということを保証しておられると思う。

「無いものを慕え」

なんて、そんなことは神さまは仰るはずがない。それだつたら肩すかしです。相撲<sup>すもう</sup>でも「肩すかし」という技は余りよくないみたいですね。堂々と戦えと。関西の言葉で「すかたん」と言います。すかたんくらわせられたら、たまりませんよね。

「神は人の心に永遠を思う思いを授けられた」

と、これが素晴らしい。それを約束してください。「あるんだよ」と、そういうことをここに暗示されているように思います。

《もしも、「永遠の命」（この地上の生命の終わりをもつて終わらない命）があるとすれば、そして、それは人間が自ら創り出すことができない以上は、神が与えてくださるほかはない。では、神は、与えてくださるのか。どうして、それを知ることができるとか。》

人間が我々自身で自分の中から「永遠の生命<sup>いのち</sup>」を創り<sup>つく</sup>出すことは絶対不可能です。我々



は被造物であって、造られた存在ですから、どんなにIPS細胞が活躍してくれても、それは元の姿を作りだすことであって、永遠の生命を創りだすことは誰にもできない。もしも、それがあるとするならば、それは神さまが創りだしてくださる以外にはない。神さまが我々にくださる以外にない。プレゼントとしてくださるか、

「一生懸命働いたからご褒美だよ」

と、報酬として与えてくださるか、それはわかりません。けれども、人間が自らそれを自分の中から作りだせない。ただかなければならない。では、いただく条件は何なのか。これが問題なんですね。修行を積んで、それでやつとそこに辿りつくのか。善行をたくさんやったから、ご褒美でもらうのか。それとも、どなたにでもプレゼントとしてくださるのか。

どなたにでもくださるものが最高のものです。空気、これはどなた様にも与えられます。地上にいる限り。一万メートル上へ行ったら知りませんよ。そこには空気はないかも知れないけれども、地上にいる限りは、空気はどなた様にもちゃんと与えられます。太陽の光の恵み、これもどなた様にも与えられます。すべての人に無条件に与えられるものが最高のものでしょ。神さまはもしも、愛なる神ならば、きつとそういうことをしてくださるに違いないと、呑気な人間は考えてしまう。そうでない方は、

「俺みたいな者にはもらえるはずがない。こんな悪いやつに神さまがくださるはずがない」

と。人はそれぞれ自分をどう思うかによって違うと思います。怠け者でも、もらえると思うのは、ずうずうしいやつかも知れませんが、それはどうなんでしょうか。それは人間が想像によって決めることではない。神さまがお決めになることです。神さまの側で、

「生命を誰にやりたい」

と思われたら、くださるわけだから。

### ●神の側からの呼びかけ

ではいったい、神の御言みことばはどうなのかということを探っていこうと思います。それが次の、

### 《Ⅲ 神の側からの呼びかけ》

です。ここに、「呼びかけ」と書きましたけれども、だいたい、人間は神さまのことを自分でつくりだせないんです。生命をつくりだせないのと同じように、神さま自身を人間がつかまえるということはできない。向こうから自分を現してくれませう。向こうから、

「私だよ」

と言って現れてくれる。

「あつ、そうでしたか。あなたでしたか」

というのが、それが本当なんです。歴史的にみましても、たとえばモーセがそうです。モ



「モーセは80歳の時に神さまが現れてくれた。40歳の時に、自分の同胞が喧嘩しているのを見て、「やめろ、やめろ」と仲裁に入ったら——その前日に、彼は自分の同胞がエジプト人に殺されいじめられているのを見て、そのエジプト人を打って殺した——その次の日に、同胞が争っているのを見て、

「やめろ、やめろ。同胞の仲間同志で喧嘩するものではない」と言ったら、

「あんたは昨日エジプト人を殺したが、我々も殺す気か!？」

と、くつてかかられて、彼は恐くなつて、ミデアンの荒野に逃げて行つた。40年間そこで美しい奥さんと一緒に平和な生活を暮らしていた。80歳になった時に神さまが現れてきた。羊飼いをしていて、羊を追いながらホレブの山へ近づいて行く時に、神さまが現れた。「神の使い」と、出エジプト記3章に書いてある。その時に柴の木が燃えている。燃えているのだけれども、燃え尽きない。「不思議だなあ?」と思つて近づいて行つたら、天から声があつて、

「ここは聖なる場所である。お前の靴を脱げ」

と、神の側から現れた。

「私はエジプトにいる民の苦しみを聞いた。ずいぶんいじめられている。あれを助けないといかん。ついては、お前をつかわすから、お前はこんな所でよろよろしていないで、エジプトへ行つて、民を解放しろ」

と言つて、神の方が無理やりにモーセを捕まえて、エジプトへ送り出すというくだりがこの出エジプト記3章に出てきます。

「あなたのお名前は何ですか?」

「我は有りて在るものなり」

と、そういうふうな問答があります。そのように古来、人間が神さまを捉まえるということとはできない。神の側から自分を現して、しかも言葉をかけてくださるんです、イスラエルでは。言葉をかけている。それを聖書では「啓示」という言い方をしています。

「預言者」というのは、神からのそういう語りかけを聞いて、それを伝えている。神の言葉の伝達者、これが預言者といわれる者です。自分の考えを言わない。自分のことより、「伝えろ」と言われたとおりのことを伝える。これが本当の預言者なんです。それから、「祭司」というのがある。日本でいえばお坊さんですね。祭司は、罪を犯した民の罪を、動物の血を流して犠牲を献げて、

「どうぞ赦してやってください」

という執り成す役目。これが祭司というお坊さんの役目です。だから、預言者は上から神の言葉を伝えるという、上から下へおりてくる役割。祭司はお母さんになって執り成す、

「この子はいい子だから、そんなに叱らないでください。もう罪を犯しませんから」





赦してください。お詫びの徴に動物を屠<sup>ほふ</sup>つて献げますから」とやっていた。これが旧約の宗教です。

### ●罪の意識

それで、神さまの側からどんな呼びかけが人間に与えられているか。それをイザヤ書55章からひとつ取り上げました。

《「さあ、渴<sup>か</sup>いでいる者は皆、水に來たれ。金のない者も來たれ。あなたがたは、來て、金を出さずに、ただで葡萄酒と乳とを買い求めよ。<sup>2</sup>なぜ、あなたがたは、糧<sup>かて</sup>にもならぬもののために金を費やし、飽きることもできぬもののために労するののか。

この「糧にもならぬもの」、「飽きることもできぬもの」、これは食物のことではない。魂です。「魂を本當にうるおすことのできないもの、魂の渴きをうるおすことのできないもののために、あなたは一生懸命に働いて、お金を払っているではないか。もつと上等なもの、別次元の、本當にあなたの魂に喜びを与え生命を与える、そういうものを求めなさい」  
と、そう言うて呼びかけているわけです。

わたしに、よく聴き従え。そうすれば、良い物を食べることができ、最も豊かな食物で、自分を楽しませることができ。<sup>3</sup>耳を傾け、わたしに來て聴け。そうすれば、あなたがたは生きることができ。 (中略)

ここに「生きることができ」とある。ただ御飯を食べて、この自然的生命を、皆さん、生きていらつしやる。でも、そうではない。もつとそれを突き抜けた本當の生命です。

「本當の生命は神の糧<sup>かて</sup>、神の食物を食べることによつて初めて、本當の生命に至るんだよ」

と、そういうことがここで書かれているわけです。

<sup>6</sup>あなたがたは主にお会いすることのできるうちに、主を尋ねよ。近くおられるうちによび求めよ。<sup>7</sup>悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼に憐れみを施される。我々の神に帰れ、主は豊かに赦しを与えられる。<sup>8</sup>わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、わが道は、あなたがたの道とは異なっていると主は言われる。<sup>9</sup>天が地よりも高いように、わが道は、あなたがたの道よりも高く、わが思いは、あなたがたの思いよりも高い。」 (イザヤ55:1~9)《

ここはなかなか格調が高いでしょ、このイザヤ書55章のこの呼びかけは。我々は自分の限界で考えています。自分の限界内でいろいろ考える。でも、神さまの方は、

「違うんだ、違うんだ。天が地よりも高いように、東が西から遠いように、そのく



らい、あなたが想像しているものと、私の住んでいる世界、私の世界、私の中で  
 充滿している事態、生命の事態は違うんだ」

と。我々関西人は「月とすつぽん」と言います。「月とすつぽん」ほどに違う。「ほう、そう  
 ですか!」と、聖書の言葉に驚くのはいい。「これは何だろうな?」と考えるのではなくて、  
 「ほう、すごいですね、それを、あなた、くださるんですか!」  
 「そうだよ、これをあげるよ」

と。さつき弘野慶次郎先生が、  
 「赤ちゃんになりましたよ」

と言われた。そうなんです。「それでも、どうも、やはり……できない」とかではなくて、  
 「ほう、そうですね、凄いですね、いただきまーす!」

と。そういう単純な受けとり方です。それに対して私はちよつと注釈しますと、

「うん、それは確かにありがたい。そうしてくれるとありがたい。行きたい」

と。なにか、「帰りたい、でも、帰れない」とかいう歌がありますけれども(笑)、

「神さま、帰って来いと言うけれども。帰りたい、でも、私は帰れないんです」  
 「なぜか?」

「私は汚れた人間で、罪があります。私はあなたの前に出られるような立派な人間  
 ではない。だから、行きたいけれども、行けないんです」

と。こういう気持ち、皆さん、あるのではありませんか。聖なる神さまの前に人間はお  
 よそ立てない。聖なる神さまに「どうぞ」と言われて行ける、そういう人はいないんです。  
 福音書の中にもあります。宮でそういう祈りをやっていたパリサイ人びとがいました。

「私は、あの鳥居の外にいるようなあんなやつではない。一週間に二回断食し  
 ています。献金はこれだけやっています」

と、胸を張って祈っていた。ところが、鳥居の外にいる人は、

「罪びとなる私をお赦してください」

と、これだけしか祈れなかった。キリストは言われた、

「神さまがお受け入れくださったのは(つまり義とされたのは)、神さまが『よし  
 (義)』と言ってくださったのは、この立派なパリサイ人びとではない。あの鳥居の  
 外でものを言っていたあのんだよ」

と。神の前に

「自分は立派な者です」

と発する人はとんでもない人です。そういうのが「パリサイ人びと」という人たちの中にも  
 凄くたくさんいます。キリストは最も嫌いだった。己を義とする人、自分を何ものかと思っ  
 て、胸を張っている人。そういうのではない。誰も神さまの前にまともに出られる人間な  
 らないではないかと。



「でも、あなたによって生命をいただくしか、私には希望がない。受けとつてくれなければ、私は滅びて行つて陰府に下つていくのが当然の定めです。でも、それでは私は辛くて辛くて、希望がなくて、生きていく心地がしない。だから、あなたの光を慕っているんです」

と。そういう魂を神さまが、「それでいいんだよ」と言つて、受け入れてくださる。それが次の詩篇130篇の所に出ています。

《このような神の呼びかけに対して、人間の側には、なお、躊躇する何かがある。それは、人によって異なるであろうが、次のような思いを抱く人があるだろう。それは、人は、罪深い人間は、聖なる神の前に出られない、との「罪の意識」である。それでいて、なお、赦しを求める思いがある。次の詩篇130篇が思いを代弁してくれている。

「主よ、わたしは深い淵から、あなたに呼ばれる。主よ、どうか、わが声を聞き、あなたの耳をわが願いの声に傾けてください。主よ、あなたがもし、もろもろの不義に目をとめられるならば、主よ、誰が立つことができましようか。しかし、あなたには、赦しがあるので、人に畏れかきこまれるでしょう。わたしは主を待ち望みます。わが魂は待ち望みます。その御言葉によつて、わたしは望みを抱きます。わが魂は夜回りが暁を待つにまさり、夜回りが暁を待つにまさつて主を待ち望みます。イスラエルよ、主によつて望みを抱け。主には、慈しみがあがり、また豊かなあがりがあるからです。主はイスラエルを、そのもろもろの不義からあがなわれます。」(詩篇130・1〜8)

これは個人の祈りの呻きであると同時に、自分の同胞のイスラエルに対しても、「こうなんだよ」と言つて呼びかけている。そういう詩です。「夜回り」というのは夜のいろんな見張りをする人たちです。夜は何があるかわからない。だから、絶えず緊張して、早く朝になつてほしいと、暁を待つている。そのように私の魂はあなたを待つています、という切なる訴えです。これに対して詩篇103篇は美事に応えてくれています。

「わが魂よ、主をほめよ。わがうちなるすべてのものよ、その聖なる御名をほめよ。わが魂よ、主をほめよ。そのすべての恵みを心にとめよ。主は、あなたのすべての不義を赦し、あなたのすべての病を癒し、あなたの命を墓から贖い出し、慈しみと憐れみとを、あなたに被らせ、あなたの生きながらえる限り、良き物をもつて、あなたを飽き足らせられる。こうして、あなたは若返つて、鷺のように新たになる。

この「良き物」はもちろん魂にです。霊の世界です。自分の魂を内的な恵み、良きものもつて満たしてください。だから、あなたは若返つて鷺のように新たになると。

主は、すべて、しいたげられる者のために正義と公正とを行われる。主は、



己の道をモーセに知らせ、己の仕事をイスラエルの人々に知らせられた。

<sup>8</sup>主は、憐れみに富み、恵み深く、怒ること遅く、慈しみ豊かでいらせられる。

<sup>9</sup>主は、常に責めることをせず、また、どこしえに怒りを抱かれない。<sup>10</sup>主は、

われらの罪にしたがつて我らをあしらわれず、われらの不義にしたがつて報

いられない。<sup>11</sup>天が地よりも高いように、主が己を畏れる者に賜わる慈しみは

大きい。<sup>12</sup>東が西から遠いように、主は我らの咎を我らから遠ざけられる。

<sup>13</sup>父がその子を憐れむように、<sup>14</sup>主は己を畏れる者を憐れまれる。主は、われ

らの造られた様を知り、我らの塵であることを覚えていられるからである。

「人は土から造られてまた土に還る」と、創世記にありますように。

<sup>15</sup>人は、その齢は草のごとく、その栄えは野の花にひとしい。<sup>16</sup>風がその上を

過ぎると、失せて跡なく、その場所に聞いても、もはやそれを知らない。

イスラエルの方の風は熱風なんです。熱風が吹きますと、草や花は枯れて凋んでしまう。

<sup>17</sup>しかし、主の慈しみは、どこしえからどこしえまで、主を畏れる者の上にあ

り、その義は、子らの子に及び、<sup>18</sup>その契約を守り、その命令を心にとめて行

う者にまで及ぶ。<sup>19</sup>主は、その玉座を天に堅く据えられ、そのまつりごとは、

すべての物を統べ治める。<sup>20</sup>主の使いたちよ、その御言葉の声を聞いて、これ

を行う勇士たちよ、主をほめまつれ。<sup>21</sup>そのすべての万軍よ、主の御心を行う

僕たちよ、主をほめよ、<sup>22</sup>主が造られたすべての物よ、そのまつりごとの下

にあるすべての所で、主をほめよ。わが魂よ、主をほめよ。」(詩篇103・1〜22)《

この詩篇103篇というのは正に旧約聖書の中の福音そのものです。実に素晴らしい詩篇です。

このようにして、旧約聖書の世界の中で人の魂の思い、現実の感謝の事態、そんなもの

を見てきました。そして、それにも拘らず人は永遠を慕い、しかもそれを自分で何ともす

ることができない。もし、道が開けるとしたら、神さまの方から乗り出してきてくださって、

「大丈夫だよ、私がいるではないか」

と言って呼びかけてもらうしかない、ということを見てきました。しかも、それは人間の

いろんな罪深さにも拘らず、

「赦しがあるから大丈夫だ」

と、詩篇130篇では言ってくれていました。そして、103篇では実に福音そのもののような、

素晴らしい讃美の歌がここで奏でられている。作者は誰かわかりません。わかりませんけ

れども、その中に含まれている内容は実に尊い豊かな素晴らしいものだと思います。

### ●新約の世界——キリストの福音

こういった旧約の世界から今度は、新約の世界、キリストの世界を見てみたいと思います。それが次の「新約の世界」というところです。



## 《Ⅳ 新約の世界——キリストの福音》

旧約における人間の側の嘆き、悲しみ、<sup>はかな</sup>儂さ、罪とがの責め、苦しみ、呻き、その中の「永遠の生命」「永遠なるもの」への願い、これらの全てを一身に背負って現れたのが、ナザレのイエスという人だった。この人は、自らを「神から遣わされた者」と自覚していた。

この「神から遣わされた者」という言い方はヨハネ伝で、キリストが自分のことを人々に語られる時に、

「私は父から遣わされた」

と。そして、父なる神さまを指し示す時に、

「私をお遣わしになった方」

と言っておられます。ヨハネ伝福音書の独特な言い方です。それがここにあります。自分のことを「神から遣わされた者」と自覚していらつしやった。

神に「父よ」と呼びかけ、絶えず父なる神の懐の中に祈り入っていた。天地万物の創造される前から天界において神と共にあったとの自覚をもっていた。》

さらにと書きましたけれども、本当に未だかつて神さまに向かつて

「父よ」

なんて呼びかけた方がいらつしやるんでしょうか、古今東西。

だいたい、我々は神さまなんかわからない。神さまなんて、そんなのはどこにいるかわからないし、まず見えないわけです。向こうが声をかけてくれたら、「はっ」と気がつきますよ。私はそんな肉声で神さまから声をかけられたことは一度も体験してません。せいぜい、人間は「かみなり」というのを知ってます。あれは、「神さまが鳴っている」という「かみなり（雷）」ですね。

最後の晩餐の直前くらいに、神さまがキリストに語りかけられることがヨハネ伝に出てくる。キリストはちゃんと神からの語りかけとして受けとった。ところが、周りの人々は、

「あれは雷が鳴った」

と言う。ある人は、

「いや、神さまが語りかけたんだ」

と言っているところがヨハネ伝12章あたりに出てきます。そのように、神さまの側からは人間に、時に語りかけてくることができますけれども、こっちはは<sup>たど</sup>辿りつくこともできないし、こっちから呼び込むこともできません。そういう正体不明なのが、我々から見た神さまです。だから、正体不明な神さまに、

「出てきてくれよ」

と叫んで、出てきてもらうしかない。しかも、出てきてくれるか全然わからないでしょ。そんな神さまをどうやってわかるのか。預言者というのは、さつきから言ってますように、



神の側から顕れてきて、全然知らないうちに、グツと捕まえられて、  
「お前を用いる」

と言われて、イザヤでも始めは逃げ惑っていた。第一イザヤですけれども。

「私はそんな器ではありません。私は汚れた者です」

と。ところが、炭火のようなものが自分の唇をさつと焼いたという異象を見た。それで、

「お前は聖い」

と言われた。そこでイザヤは、

「はい、私は参ります!」

と言った。これは第一イザヤです。さっきのイザヤ書55章のイザヤ〔第二イザヤ〕ではない。

預言者は、神さまから召されるのは結構な話だけれども、なにせ預言者も人間でしょ。罪も犯します。時には

「もうしんどいなあ」

と思うこともあるでしょう。そうしたら、神さまはご機嫌わるいわけですね。やはり神さまの側からは徹頭徹尾、自分の言いなりに「はい。はい」と言う者が好きなわけです。預言者は時にはししぶしぶ——エレミヤなんてのは気の毒です——

「語れ!」

と言われるから語る。そうすると、民は気に食わない。偽預言者は民が喜ぶようなことを言うんです、ご機嫌をとる。そしてみなワーツとそこへ投票するわけです——いや、国会の話ではありませんよ(笑)——つまり、機嫌のよいことを言ってくれる預言者を人々は好んだ。やしたるけれども、エレミヤのように聞きたくないことをズバリズバリ言って、

「悔い改めろ、お前たちはこれではだめだ」

と言うのは、完全に迫害されるんです。だから、エレミヤは

「神さま、堪忍してよ。あなたが言われるとおりに言えば、民にやられるし、言

わないと、あなたの言葉は私の中で燃えているようで苦しい。もう勘弁して

ください」

と。神さまと民衆の間に立って、エレミヤはものすごく苦しみます。もう最後には自分が生まれてきたことを呪っています。それがエレミヤという本当に気の毒な預言者でした。

そんなふうなことなので、神さまと付き合いをするというのは大変なことですよ。あんな素晴らしいモーセだつて、やはり一回どこかでしくじったみたいなんです。遙かかなたのカナン<sup>はる</sup>の地へ民は入って行く。でも、自分はピスガの頂きでストップですよ。それはやはりモーセが何か神さまに一回罪を犯したらしい。その責任をとらされて、ストップをくらっている。あとはヨシヤが民を率いてカナンの地へ入って行く。

とにかく、旧約聖書の神さまは恐いでしょ。本当にちよつとしたことでも赦されない。ちよつとでも失敗したらもうアウトです。たとえば、「契約の箱」というモーセの十誡が入っ



ている箱を担いで行く人がいて、牛がよろめいたので、箱に手を伸ばして押さえようとしたら、即死ですよ、「聖なるものに手を触れた」といって。それはしかし過失犯だ。故意にしたらいけませんけれども、過失で契約の箱に手を触れただけで即死でした。

こんな旧約聖書の恐い神さまとは、よう付き合いませんと思うんですけども。でも、なかなかイザヤ書55章とかの言葉にはホロリとするようなところも出てくる。要するに非常に旧約聖書は厳しい世界です。

〔註：歴代志略上13・9〜10。「一行がキドンの麦打ち場にさしかかったとき、牛がよろめいたので、ウザは手を伸ばして箱を押さえようとした。ウザが箱に手を伸ばしたので、ウザに対して主は怒りを発し、彼を打たれた。彼はその場で、神の御前で死んだ。〕

### ●恩恵と真理はイエス・キリストを通して

ヨハネ伝の最初のところに出てきます、

「<sup>おきて</sup>律法はモーセを通して与えられたけれども、<sup>めぐみ</sup>恩恵と真理はイエス・キリストによってやってきた」（ヨハネ1・17）

と。つまり、律法は裁くんです、どうしても。律法が人を命づけると思っていた。神の律法というのは人を生かすはずのものなんです。

「このとおりやっていたら、お前たちは生きることができると。どうだ、やるか？」  
と言われたら、

「はい、やります！」

と言ったんですよ。ところが実際は裏切つてばかり、そして叩かれてばかり。

それに対してキリストは赦しをもつて現れてくださった。そんなふうには、やはりイスラエルの民は律法をいただいた選びの民ですし、それを誇りにもし、自信も持っていました。けれども、現実には神さまに背いてばかり、偶像を造つてばかり。

あの出エジプトの時だつて——海が二つに割れて自分たちはそこを歩いて行った。エジプト軍が攻めてきた時には、波が元にもどつて全部滅びた——

「万歳！ 万歳！」

とやっていった。ところが、三日たつて飲み物がないと、もう<sup>つぶや</sup>呟きだした。たった三日ですよ、あれだけの奇蹟を見ている、三日たつて飲み水がないと、

「モーセよ、よくもこんな所へ連れ出したな。俺たちをここでのたれ死にさせる気か！」

と。それがイスラエルの民なんです。だから、モーセはそのたびに神さまに祈つて、

「民がこんなことを言つて私を苦しめます。何とかしてください」

と。水がない時に神さまは、

「この岩を打て。叩いたら、そこから水が<sup>ほとぼし</sup>迸るぞ」



と。そういう奇蹟がいろいろ出てくるわけですから。あの出エジプト記の旅路を見たら、本当に人間というのは三日辛いことがあつたら、もうブーブー言い出す。そういうのが人間なんです。

厳粛な結婚式の誓いをたてて、

「あなたは生涯、愛し続けますか？」

「はい」

と。ところが現実には4組のうち1組は離婚しているという、今は日本でも。あるいはもつとだんだん多くなっているかもしれない。人間というのは、そのくらい変わりやすい不完全なものです。人間はしょうがない。しょうがないものをまともにしていくのがまた神さまで。ひらきなおれば、

「こんな私にしたのはあなたでしょ。あなたがもつと私を立派な人間につくつてく

れたなら、こんなことになつてないですよ」

ということが言えるわけです。

そういうような不満を全部背負ったのがキリストなんです。だから、キリストという方は何と凄い方かと。福音書を読んでごらん下さい。キリストは何一つ悪いことをしません。病める人間を見たら、癒してあげる。苦しんでいる人があつたら慰めてあげる。

「あらゆる病を全部癒された」

と、サラリと書いてある。あんな凄いお方を民衆は最後には十字架につけて殺してしまうことに賛同した。付和雷同といいますが、さんざん自分たちは恵みを受けていながら、最後にはそそのかされて、群衆心理で、

「十字架につけろ、十字架につけろ！ バラバをゆるせ、イエスを殺せ！」

なんて言ったり。そういう連中を前にして、皆さんだつたらどうなさいますか？

「この裏切りもの！ 恩知らずめ、このどアホウ！ バカたれ！」

と、さんざん私なら言いますね。ところがこのお方は違うんです。十字架の上で、

「父よ、彼らを赦してやってください。彼らは自分で自分のしていることがわ

かっていない。駄々をこねている子供なんです」

と。こんなのを聞いたら本当に参ります。これを聞いて何とも思わぬ人間は、私はちよつとどうかしていると思う。それが人間なんです。本ものにぶつかつたら、みな感動する。年齢なんか関係ありません。年をとればとるほど涙もろくなります。あのイエスという方は十字架の上で、「彼らを赦してやってください。彼らは自分で自分のやっていることがわからないんです。駄々をこねている子供なんです」と。これはよほどのでかい人間ですわ。本当に凄いですよ。もうあれだけでキリストさまに圧倒されます。本当にハートを持った方です。

「敵をゆるせ」





ということも言われた。

「自分に善くしてくれる者のために善くしてやるのは、誰でもやっている。しかしながら、自分を呪う者、自分を迫害する者のためにこそ祈ってやれ。天の父は善き者にも悪しき者にも太陽をのぼらせ、善良な者にもそうでない者にも雨を降らしたもう。天の父の全きま tuttaようにあなた方も全き者であれ」と言われた。その全き姿というのは、無条件に人を赦すという、その愛の姿を貫くという、これなんです。口先ではない。イエスは実際にやった。だから、私はイエスという方を尊敬する。慕うわけです。口先だけの人間はいつぱいいますよ。ところが、あのお方は言葉と實際がピタッと一つ。しかも、イエスはここに「神から遣つかわされた方」とあります。「遣わされた方」は、

「お遣わしになった方の御意みこころだけが大事だ」

と言っているんです。自分の利害関係ではない。自分をこの世に送りだされたそのお方を「父」と呼んで親しむ。「父と子」という愛の関係で結ばれている。信じ合い、愛し合うという、信愛関係で結ばれている父と子。それでいながら、もう一つの面は「主しゅと僕しもべ」、僕は主の命令にすべて従う。それが自分に有利であろうが不利であろうが、都合が良からうが悪からうが、そんなことは関係ない。

「御意ならばそれに従います」

と、これを貫いていく。これを「義」という。義というのは、御意がスーツと通っている姿を義という。愛というのは、全部を担になわれている姿、担い救い上げている姿、これが愛でしょ。

「イエスは愛の人である」

ということは皆さん知ってます、福音書を見たら。同時に義の姿です、

「神の御意ならばどんなことでも」

と。あのゲッセマネで祈られて苦しみました。ゲッセマネの祈り、十字架の前です。弟子たちに、

「お前たちも祈っていてほしい」

と頼まれたのに、みな寝ていた。祈っておられる声は聞こえませんでした。だから、福音書に書かれているので、本当に寝ていて聞こえていなかったら、福音書なんて書けるはずがない。だから、聞こえていたんです。

「父よ、この酒杯さかづきをどうしても飲まねばならないのですか。他に本当に道がな

いんですか」

と言って、

「額ひたいから落ちる汗は血の滴しずくのようだった」

とルカ伝に書いてある。人々は言います、



「イエスもやはり人間だ。死を前にしてあんなに苦しんでいるではないか」と。とんでもない。イエスはいわゆるこの世の命、自然的生命の死なんでものは全然恐れおられない。自分の中にそれを突き抜ける本当の生命を持っておられるから。

では、何で苦しまれたのか。ここからは誰にもわからない。私が想像しますには、今まで離れたことがなかったお方、「父」と呼び、「子」と呼びかけられる。「あなたと私は常に一つです」と。

「父と私は一つなり。私を見た者は父を見た」

と言われた。そのくらいに、見えない父なる神さまは、イエスというそのお方と——まるで「アマルガム」といいます——渾然こんぜん一体、どの部分が父で、どの部分がイエスカわからなくらいに一つであった。それが今、引き離されようとしている。永遠に引き離されようとしている。天と地が離れているように、東と西が遠いように、それくらい神さまとイエスという方が引き裂かれて、永遠の地獄に突き落とされようとしている。その

「神さまと一つでおれない」

という、その苦しみではなかったかなと私は思うんです。

皆さんはどうですか。クリスチャンの方が三日間お祈りしなくても、平気なのではないですか。三日間、聖書を読まなくても平気なのではないですか。

「三日三晩ちよつと何かもの足りないな。聖書を読もうか。ああ、これだった、これだった。ここへ帰ってくるべきだった。ここが私の本国であった」

というようなことがよくあります。でも、イエスというお方は父なる神さまと一つなんです。それが今、引き裂かれようとなさっている。それがとても耐えられなかったのではないかなど。これは私の想像にすぎません。でも、

「御意みこころならば……。他にないんですか、他にないんですか？」

と、問いかけられた。

「でも、どうしてもこれ以外にないなら、私はお受けします」

と言って立ち上がって、あのヴィア・ドロローサ [Via Dolorosa 「苦難の道」] 十字架の道、ゴルゴタの丘へと突き進んで行かれた。よろめきながら、十字架を負わされた。そして、別の男の人が代りに背負ってくれました。そういう場面があります。そして十字架に付けられる。痛かったと思いますよ、釘付けでね。本当に、そうでしょ、五寸釘みたいのでブスツとやられたら、それは痛いですよ。イエスだって人間ですもの。でも、他の十字架にかけられた人は長い時間苦しむのが、イエスの場合には3時間程度で短かった。そんなことが福音書に出てきます。最後は、

「父よ、わが霊をあなたの御手みてにゆだねます」

と。私はこの方は凄いと思います。この方は人ではあったけれども、本当に人らしい人、人間らしい人だったけれども、またそれを超えた、やはり神さまの質を持っていた。愛の



質を持つていた。そして、

「御意には完全に従う」

という義の面を貫かれた。凄いお方です。義と愛がこのお方によって一つになっている。そういうことを私は思う。しかも、ご自分のために必要はなかったんです。

預言者エリヤというのがいました。その方は火の車に乗って天に昇って行った。エノクという預言者は365年間生きて、そして

「見えずなりぬ」

と、彼はそのまま天界へ行つた。それから次はエリヤが天界へ行きました。

イエスという方は神さまの御意を100%に貫いた方ですよ。あの山上で弟子たち三人を連れて祈っておられたら、真っ白に輝かれた。天からエリヤとモーセが顕れてきて、

「どのようにしてイエスが十字架におかかになるか、どういう死に方をなさるか、どのようにして天国にお入りになるか、そのことについて相談していた」

と書いてある。あまりにも凄い情景にでつくわしたから、ペテロもヤコブもヨハネも真っ青ですね。それでうわ言を言い出したですよ、

「ここに小屋を二つ建てましょう、そしていつまでも一緒に住みましょう」

とか、うわ言を言っていた。しばらくすると、モーセたちは白い雲に覆われて天に帰りました。あとはイエスしか見えなかった。イエスは、

「今日のごことは絶対に誰にも言うな」

と、口止めされました。ああいう場面は本当だと思います。イエスはそのくらいの方です。神の御意を完全に行い、神さまの霊が充滿している。そうしたら、物理法則を乗り越えるくらいのお方ですから、湖の上だつて歩けるようなお方ですよ。その湖の上を歩いてきたイエスに対して、おつちよこちよいのペテロは、

「私もあなたの所へ行かしてください」

と言いだしたら、

「来い！」

と言われた。それで彼は行ったんですよ。三步あるいて行ってイエスの所へ来たら、ハッと我にかえって、やれやれと思ったんですよ、

「俺は何しているのか!? 海の上か、こわい！」

と思ったとたんに溺れかかったと書いてある。イエスは彼を捕まえて、船に乗られたという。そんな話が出てくるでしょ。

信じない人はたくさんいますよ。特に聖書の学者さんとか、そういう方はみな信じない。私は信じるんです。幸せですわ。学者は不幸ですよ。私は信じます。イエスほどの方なら、それは当たり前ではないかと。ラザロを甦らされた方ですよ。墓の中で四日間いて臭くなっているラザロに、



「出ていー」

と言ったら、ラザロは出てきたという。そのくらいのお方なんですから。時には、五つのパンと二匹の魚を手にして祈られた。そこに永遠の生命を吹き込まれた。このパンはただのパンではない。

「これは生命のパン、これを食べる者は死なない」

という気持ちをごめて、それを分け与えられたら、

「男ばかり五千人が食べた」

と書いてある。女子供をいれたら、一万人ですよ。それが満腹して、残りかすを集めたら、十二の籠かごにいっぱいになったという。それも学者は信じないでしょうね。私は信じます。

イエスはそんな方なんです。そんな方だからこそ、我々が死んでも死なないような生命をくださるわけです。

ご自分はその復活の姿で現れたですよ。一端、墓に葬られた。けれども、三日目には墓に死体がなかった。忽然こっぜんとして、まばゆい姿で現れられた。霊体です。我々ならば、肉体はそのまま朽ち果てます。キリストの場合はどうも、肉体自身が変貌してしまつたみたいですね。つまり、肉体はないんですもの。

「弟子たちがどこかへ隠したのに違いない」

と言って、一生懸命でみな捜したと書いてあるが、全然見つからない。それはキリストは、身体そのものが変貌したのだと思います、霊の姿に。霊体ですね。

それで今度は、弟子たちが戸を閉じて隠れて恐がっていた。迫害を受けて。そしたら、そこにスツと顕れてきた。

「弟子たちは主を見て喜べり」

とルカ伝に書いてある。そんなふうには、あのキリストのご復活の姿というのはまた素晴らしい。エマオの途上では、旅人の姿で一緒に旅して、

「お前たちは何をしゃべっているのか？」

「都でえらいことが起こつたんですよ」

「何だね、それは？」

なんて、とぼけて聞くと、

「あんたは知らんのかね？ もう都は大騒ぎですよ。イエスという業わざにも言葉にも力ある預言者なのに、祭司長らに殺されてしまつて、今日は墓に葬られて三日目で、しかも我々を愚弄ぐろうするように、『イエスは甦よみがえつた』なんて言うのがいるんですよ」

と。そうしたら、その旅人はいろいろと話しかけて、

「ああ、物分かりのわるい者たちだ、イエスは甦よみがえるはずではなかったか」

と言い出した。弟子たちは、



「夜も近づいてきたし、今晚ここまでにしませう。御飯を食べませう。ここで一緒に休みませう」

と言った。そして、その旅人は食卓でパンを裂かれた。その姿がイエスそっくり。「あつ」と思ったら、姿がパツと消えたという。

「ああ、イエスであったか。あの旅人が途中で話して来た時に、心が内に燃えた。あの方が話したら、だんだん内側が熱くなった。あれはイエスだった。旅人の姿をしたイエスだ。さあ、こんな所で留まっていられるか」

と言って、もう一回エルサレムに戻った。そして、弟子たちが集まっていた、「ペテロにイエスが現れたらしい」

とまたやっている。そうやっている所に、イエスがまたスツと現れた。そういうお話が出てきています。実に愉快な話ですよ。これは全部、私は本当だと思えます。それからまた、

「イエスが現れて、湖に網をおろしたら、お魚が全部で153尾採れた」とか、そんな話も出てきます。いろいろ不思議なことがあります。

日本でも弘法大師さんについては、もの凄いなんな不思議な話が伝わっているでしょ。弘法大師さんは素晴らしいお方だったんだと私は思います。日本の方々が「お大師さん、お大師さん」と慕っている。弘法大師さんでさえ、いろいろな不思議な業わざがいろいろ語り伝えられている。その他、日蓮とかいろいろなお坊さんにおいても不思議なことが伝えられている。みんな本当だと思う。

ましてや、イエスという方については、当たり前ではないですか。でなかつたら、全世界を救いあげるなんてことは出来っこありませんよ。しかも、救いあげるといふことは、なにも物理的に地球を永遠に存在させるというのではない。人に死んでも死なない生命を与えることです。

「死を突破して、あなた方一人ひとりを本当に私の変貌の姿と同じ姿にしてみせる。それが本当の生命だ。地上のものは過ぎ去っていく。地上で過ぎ去らない、滅びない、そうしたものを私は与える。それを与えるために私はやって来た。私はそのため遣わされた。」

と。これがこのお方の自覚だったんです。

### ●永遠の命を得ること

はい、途中でかなり先へ行きましたけれども、プリントに戻りませう。

《有名な、ニコデモとの対話の中で、

「よくよく言っておく。わたしたちは自分の知っていることを語り、また自分の見たことを証しているのに、あなたがたは、わたしたちの証しを受け入れない。わたしが地上の事を語っているのに、あなたがたが信じないならば、



天上の事を語った場合、どうしてそれを信じるだろうか。<sup>12</sup>天から下って来た者、すなわち、人の子（イエスのこと）のほかには、誰も天に昇った者はいない。」（ヨハネ3・11〜13）

と証言している。そして、この方にとって最も大切なことは、父なる神の御思いに応えること、父の御心（御意）に従うことであつた。人々との問答のなかで、次のように言つておられる。

「<sup>32</sup>そこでイエスは彼らに言われた。「よくよく言つておく。天からのパンをあなたがたに与えたのは、モーセではない。天からの真のパンをあなたがたに与えるのは、わたしの父なのである。<sup>33</sup>神のパンは、天から下って来て、この世に命を与えるものである。」<sup>34</sup>彼らはイエスに言った、「主よ、そのパンをいづもわたしたちにください。」<sup>35</sup>イエスは彼らに言われた、「わたしが命のパンである。わたしに来る者は、決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。<sup>36</sup>しかし、あなたがたに言ったが、あなたがたは、わたしを見たのに信じようとはしない。<sup>37</sup>父がわたしに与えてくださる者は皆わたしに来るであろう。そして、わたしに来る者を決して拒みはしない。<sup>38</sup>わたしが天から下って来たのは、自分の心のままを行うためではなく、わたしを遣わされた方の御心（御意）を行うためである。<sup>39</sup>わたしを遣わされた方の御心（御意）は、わたしに与えてくださった者を、わたしが一人も失わずに、終わりの日に甦らせることである。<sup>40</sup>わたしの父の御心（御意）は、子を見て信じる者が、ことごとく永遠の命を得ることなのである。そして、わたしはその人々を終わりの日に甦らせるであろう。」（ヨハネ6・32〜40）

ここで「みこころ」というのを、いわゆるハートの「心」と、意志の「意」というのを二つ書きました。どうしても、普通「みこころ」というのをハートの「心」を書くとき弱いやはり意志です、神さまの意志。神の御意志を実現する。それがキリストのお気持ちなんです。ですから、括弧して「御意」と書きました。それからここに「永遠の生命」とあつて、「わたしはその人々を終わりの日に甦らせる」

とあります。「終わりの日」とは何なのでしょうか。普通は、

「最後の審判を終えて、新天新地が到来する時」

と理解されています。多分そうじゃないかと思う。けれども、私はそうはとらない。

「それ以前に、私たちの人生の終わりの時に、直ちにキリストと同じあの栄光の姿、

あの霊体をいただく」

という、私はそれを確信しています。そんな何千年後かわからないものを、新天新地の到来なんていう時まで待つていられますかいな。それまで墓の中で眠りっぱなしなんて、そんな呑気なことを言うてられませんか。皆さん、それで充分納得できますか。ヨーロッパ



の人は納得しているのかもしれないけれども。ヨーロッパの人は灰にしないで、土葬でしよ。何でかというと、

「甦らなくてはならんから」

という。ミイラになって何千年後かわからん先のことをそんなふうには気に考えている。私はいやだ。私はこの世を去ったら、サツとキリストさまと同じあの姿でキリストにお会いする。そうでないとやりきれん。

実際それを体験してきた人がいるんです。ベティー・イーデー [Eadie, Betty J. 1942] さんというアメリカンインディアンの女性です。その方が4時間死んでいた。4時間死んでいた間、向こうの世界でキリストにお会いしてきたという。

「素晴らしい世界だった」

と本に書いてくれている。あの本を読んだら、本当に聖書はもつともつとよくわかる。「なるほど、キリストの言っているらしいやつたのはこのことだな」と。

〔註：『死んで私が体験したこと』——主の光に抱かれた至福の四時間——同朋舎出版 1995刊〕

それから、インドにサンダー・シング [Sunder Singh (Sadhu) 1889 ~ 1929] という人がいました。彼は1919年に日本にもやって来たらしい。素晴らしい方です。このサンダー・シングという方がやはりキリストに何度もお会いしている。この方は若い頃(15歳頃)に行き詰まって自殺しようとした。朝の3時に湯浴みして身体を清めて、午前5時頃に通る一番列車に身を投じて、そこで死のうとしていた。そしたら、その朝、部屋の中が火事のように真っ赤になって、そこへキリストが現れた。それで彼はガラリと変わった。それ以来、彼は親族から迫害を受ける。インドのある宗教の跡取りだったものだから。それを裏切って、わけのわからんキリストなるものに出会ったなんて言って、出かけて行こうとするから、毒を盛られる。死にかかるけれども、それを助けられて、いろんな奇蹟を体験しながら、彼は本当にそこでキリストと何度も問答をします。それを記録に書いてくれているのがある。そのサンダー・シングのやっていることがヨハネ伝に書いてあることと本当にそっくりです。そういうことで、天上の世界、我々が体験できない世界は絶対に存在します。パウロは、

「第三の天に引き上げられた。そこで人の聞いてはならない言葉を聞いた」

と言っています。あまりにも凄すぎたので、

「神さまは、自分が天狗にならないように刺を与えられた。その刺を取ってく

れと何度頼んでも、神さまは許してくれなかった。それは自分が高慢になら

ないためだ」

と、コリント後書に出てくる。

そんなふうには天上の世界は——私たちはこの見える世界に生きていますけれども——それ(第三の天)はどこにあるか知りませんよ、そんな大空の向こうとは思いません。だから、



やはり別次元です。私たちの生きているのと違う次元に神の世界があつて、それは神の次元であつて、そこが実は本当の实在界なんだ。そこが实在界で、こつちはその投影かもしれない。ここが实在界ではなくて、向こうに本当の实在界がある。その实在界から神が現れてきて、語りかけたりした。そして、その实在界からやつて来たのがイエスというお方です。宿ったのはマリアさんのおなかの中だけでも、もともと居たのは神さまのところに居たんですよ。だから、神さまの要素が半分と、人間の要素が半分入ったのが、イエスというお方ではないでしょうか、マリアさんの血を受けていますから。もともと、神と共にあられた、

「太初に言ありき」  
はじめ ことば

と言われたそのお方が、霊なるお方がマリアに宿った。ですから、ちょうど天の次元と地の次元と両方を持つておられた。自分はたえず

「父よ!」

といつて祈つておられる。「かぐや姫」がそうなんです。かぐや姫は、

「月から来たから月へ帰りたい、帰りたい」

と言つてゐるわけですよ。それと同じにキリストも天から降くだつてこられたからやはり天を慕つてゐる。同時に、遣つかわされた方として、この地に本当の生命をもたらすために来られた。何人も預言者がやつて来たけれども、民は動かなかつた。

「もう最後の切り札はこれだ」

と言つて、神さまは遣つかわされた。その自覚を持つていたのがイエスというお方で、父のこととを「私を遣つかわしてくださいださつたお方」と言つて、

「私は遣つかわされてきた者」

と言つておられるわけですから、非常に辻褄が合うんです。この方はちゃんと向こうから来たから、向こうのことがよくわかつてゐる。誰も向こうのことは知らん。だから、信じてない。けれども、このお方は向こうから来たんですから、自分の本国のことはわかつてゐる。その本国に連れて行くこととしてくれているのに、人は信じない。これが福音書で、人々との問答が常にちぐはぐなわけですね。

## ●肉と霊

そのあたりが次に書いてあります。特にパウロは「肉」と「霊」ということを言います。「肉」は、生まれながらの人間性で、またそれは質的には自己中心的事物ということ。「霊」というのは神さまの次元のことです。

《私たちは、生まれながらの人間（それを聖書では、「肉」と表現している。）のままでは、

「永遠の命」を持つていないし、天の次元（永遠の世界）とは無縁である。それは、神ご自身から賜たまはるほかはない。どうすれば、永遠の世界に入れるのか。ニコデ





モとの対話の中で、イエスは次のように言っておられる。

「<sup>3</sup>……よくよくあなたに言っておく。だれでも新しく生まれなければ、神の国を見ることはできない。……<sup>5</sup>だれでも、水と霊とから生まれなければ、神の国に入ることはできない。<sup>6</sup>肉から生まれる者は肉であり、霊から生まれる者は霊である。<sup>7</sup>あなたがたは新しく生まれなければならないと、わたしが言ったからとて、不思議に思うに及ばない。<sup>8</sup>風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこから来て、どこへ行くかは知らない。霊から生まれる者もみな、それと同じである。」(ヨハネ3:3~8)

このように語ったあと、

「<sup>13</sup>天から下ってきた者、すなわち、人の子のほかには、だれも天に上った者はない。<sup>14</sup>そして、ちょうどモーセが荒野で蛇を上げたように、人の子もまた、上げられなければならない。」

この「モーセが荒野で蛇を上げた」というのは、民が神さまにつぶやいて罪をたくさん犯した。それを許していただくために、神の命令はモーセに、

「青銅の蛇を高く天にかざせ、それを仰ぎ見た者は病が癒される。しかし、そんなものはバカにして相手にしない者はそのまま死んでいく」ということが民数記略に出てます。

〔註：民数記略21・6~9〕「主は炎の蛇を民に向かつて送られた。蛇は民をかみ、イスラエルの民の中から多くの死者が出た。民はモーセのもとに来て言った。「わたしたちは主とあなたを非難して、罪を犯しました。主に祈って、わたしたちから蛇を取り除いてください。」モーセは民のために主に祈った。主はモーセに言われた。「あなたは炎の蛇を造り、旗竿の先に掲げよ。蛇にかまれた者がそれを見上げれば、命を得る。」モーセは青銅で一つの蛇を造り、旗竿の先に掲げた。蛇が人をかんでも、その人が青銅の蛇を仰ぐと、命を得た。」

即ち、「蛇」というのは呪いの象徴なんです。民の罪というものを全部、「呪いの蛇」が背負って、そして天に上げられる。これが実は、「イエスが十字架にかけられる姿を表している」というふうにごく言われているわけです。

人の子もまた上げられなければならない。<sup>15</sup>それは、彼を信じる者が、すべて永遠の命を得るためである。」(ヨハネ3:13~15)

と語っておられる。即ち、ご自分が人々の罪過(罪、咎)を背負って十字架に架かることを暗示しておられる。また、羊と牧者との関係に見立てて語られているところ(ヨハネ伝10章)では、

「<sup>10</sup>……わたしが来たのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである。」

<sup>11</sup>わたしは善い羊飼いです。よい羊飼いは、羊のために命を捨てる。(中略)

<sup>17</sup>父は、わたしが自分の命を捨てるから、わたしを愛してくださるのである。



命を捨てるのは、それを再び得るためである。<sup>18</sup> だけれが、わたしからそれを取り去るのではない。わたしが、自分からそれを捨てるのである。わたしには、それを捨てる力があり、また、それを受け取る力もある。これは、わたしの父から授かった定めである。」(ヨハネ10・10～18)

と語っておられる。

さきほどイエスは十字架の上で、「彼らを赦してやってください」と祈られたと申しました。これなんですよ。誰かに無理やりに自分が十字架にかけられて、自分の意志に反して、「いやだ、いやだ」と駄々をこねながら殺されるのではない。

「自分が自らかかるんだ。これが人々の罪を背負い、神の永遠の赦しをいただく唯一の道であるということがはつきりした。だから、私は自分を献げる」

と。そういうことをここで言っておられるわけです。

先のヨハネ福音書3章では、イエスの言葉の後、次のように書かれてある。

「<sup>16</sup>神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛してくださった。それは、御子を信じる者が、ひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。<sup>17</sup>神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によってこの世が救われるためである。<sup>18</sup>彼を信じる者は、裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神のひとり子の名を信じることをしないからである。<sup>19</sup>その裁きと違うのは、光がこの世に来たのに、人々はその行いが悪いために、光よりも闇の方を愛したことである。<sup>20</sup>悪を行っている者はみな、光を憎む。そして、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光に来ようとはしない。<sup>21</sup>しかし、真理を行っている者は光に来る。その人の行いの、神にあつてなされたというところが、明らかにされるためである。」(ヨハネ3・16～21)》

ここに「裁き」のことが出てます。神さまは人を裁かれない。裁きというのは、人はそれぞれ自分で自分を裁いているんだと。神さまは光の世界と闇の世界を与えて、

「これは生命の道だよ、あれは死の道だよ。あなたはどちらを選ぶか?」

と。そのときに、光に来る者はそこで生命にあずかるし、

「いや、私は闇がふさわしい」

と言って、闇を選んでいく人はそれまでだと。自分で自分の行く所を選んでいるという。そういう人がそうやって選んでいるかというと、

「光が世に来たのに、行いが悪いために、光よりも闇の方を愛した」

と。そうなんです、だいたい白昼の犯罪というのは少ない。夜ですよ、いろんなことが行われるのは。

「歴史は夜つくられる」

とか言いますけれども、夜にいろんなことが行われる、神さまの目の届かない所で。だから、



さっきの「夜回り」というのがあるわけですが。夜回りが見張り番をしてないと、何が起るかわからない。光が来たら、光を慕っている人は光に引かれていく。ところが、闇がきますと、闇の方へ自分を追いやっていく。それはやっていることを暴かれるのが嫌だから、光によって自分の本性が露顕するのが嫌だから、光を憎むという。だから結局、自業自得だということになりそうなんです。さらに次のように書かれています。

《さらに続けて、

「31上から来る者は、すべてのものの上にある。地から出る者は、地に属する者であって、地の事を語る。天から来る者は、すべてのものの上にある。

32彼は、その見たところ、聞いたところを証しているが、だれもその証しを受け入れない。33しかし、その証しを受け入れる者は、神がまことであることを、たしかに認めたのである。34神がお遣わしになった方は、神の言葉を語る。

神は聖霊を限りなく賜うからである。35父は御子を愛して、万物をその手にお与えになった。36御子を信じる者は、永遠の命をもつ。御子に従わない者は、命に与ることがないばかりか、神の怒りがその上にとどまるのである。」(ヨ

ハネ3・31〜36)》

ですから結局、

「人はそれぞれ自分で自分の行く道を定めている」

ということになるんです。イエスがこのように語って、

「私を無条件に受けとれば、あなたは光だ、あなたは生命だよ、さあどうぞ」と言って、ご自分を差し出しておられるのに、

「そんなもの、私は要らない」

と。無理に受けとらない者に、無理やりに与えようとはなさらない。人のそれぞれの意志というものを神さまの側は尊重される。人間は奴隷ではない、物体ではない。心がある。心から喜んで、

「ありがとう!」

と言って受けとる者を、神さまの側は喜んでくださるけれども、

「そんなものは要りません」

と言っている人間に、無理やりに押しつけなさない。だから、宗教の押し売りというのは大変いけないことです。宗教が嫌いになるのは、押し売りだから。何かそこに臭さがある。そうでなくて、

「太陽の光を見てごらん。太陽は悠久の昔から輝いて、地球を照らし続けて、地球に生命を与え続けてくれた。地球は太陽に何ひとつ恩返しをしてないではないか。ただくばっかりではないか。それでも太陽は文句を言っていないではないですか。神さまというのはそういうお方だ。『言うことをきかなかつたらぶん殴るぞ』



と、そんなのではない」  
と。与えて与えてやまない。でも、受けとらない者は仕方がない。太陽が輝いているのに、地中深く穴を掘ってそこにモグラのように籠こもっていたら、これはしょうがない。  
「さあ出てらっしゃい。春がきた。出てらっしゃい」

と。それが神さまの呼びかけでしょ。だから、神さまはみんなを絶対だとは思っていない。ハートを持った人間、自由意志を持った人間、それを思っていらいらっしゃる。自分で自分の行く道を決めていくことができる人間と思っていらいらっしゃる。ところが、その人間が本当に幼児おきなごの心になれば、「はい」と言つて、スーッと行くんだけど、人間がひねくれてきますと、疑い深いし、

「それしたら儲かりますか？ あんたの言うことに従ったら、ほんまに得しますか？ それは永遠の生命は欲しまつせ。でもやはり、地上では金が要りまんねん。金くれる？」

と、そういうのが人間ですわ。さもしいものです。でも、キリストはマタイ伝6章のところで、

「明日のことは思い煩うな。必要なものはすべて添えて与えられる。まず神さまを求めてきなさい。神の国とその義を求めなさい。そうすれば、必要なものはすべて添えて与えられる」(マタイ6・33〜34)

と。それ自体を目的に追っかけたらあかん。神さまを追っかけたら今度は、他のことは全部くつついてくる。これが本当の生き方だという。

「二日の苦労は一日で充分だ。明日のことは思い煩わなくてよろしい。神さまがあなたを愛しておられる。あなたのことは全部ご存じなんだ」  
と。それがキリストを通して語られている福音書の呼びかけなんです。

そういうことで、どうぞ、このキリストという方にもつともつと、皆さん、親しんでいただきたいと思つています。

### ●イエスの十字架

次のところへ参ります。これはイザヤ書の引用で、イエスの十字架というものがここに預言されています。イエスという方はイザヤ書をずいぶん愛読しておられたようです。ここに引用しているところはご自分に対しての預言としてお受けとりになっていたようです。

《イエスの受難については、旧約聖書のイザヤ書の預言に明示されている。第53章がそれである。

「<sup>3</sup>彼は侮られて人に捨てられ、悲しみの人で、病を知っていた。また、顔を覆おおつて忌み嫌われる者のように、彼は侮あなどられた。我々も、彼を尊ばなかつた。

<sup>4</sup>まことに彼は我々の病を負い、我々の悲しみを担った。然るに、我々は思つ



た、彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。<sup>5</sup>しかし、彼は、我々の咎のために傷つけられ、我々の不義のために砕かれたのだ。彼は自ら懲らしめを受けて、我々に平安を与え、その打たれた傷によって、我々は癒されたのだ。<sup>6</sup>我々は皆、羊のように迷って、各々、自分の道に向かつて行つた。主(神)は、我々すべての者の不義を彼の上に置かれた。<sup>7</sup>彼は、しいたげられ、苦しめられたけれども、口を開かなかつた。屠り場に引かれて行く子羊のように、また、毛を切る者の前に黙っている羊のように、口を開かなかつた。<sup>8</sup>彼は暴虐な裁きによって取り去られた。その代の人のうち、だれが思ったであろうか、彼は我が民の咎のために打たれて、生けるものの地から断たれたのだと。<sup>9</sup>彼は暴虐を行わず、その口には、偽りがなかつたけれど、その墓は悪しき者と共に設けられ、その塚は悪をなす者と共にあつた。<sup>10</sup>しかも、彼を砕くことは主(神)の御旨であり、主(神)は彼を悩まされた。彼が自分を、咎の供え物となすとき、その子孫を見ることができ、その命を永くすることができる。かつ、主(神)の御旨が彼の手によって栄える。<sup>11</sup>彼は自分の魂の苦しみにより、光を見て満足する。義なるわが僕は、その知識によって、多くの人を義とし、また彼らの不義を負う。<sup>12</sup>それゆえ、わたし(神)は、彼に大いなる者と共に物を分かち取らせる。彼は強い者と共に獲物を分かち取る。これは、彼が死に至るまで、自分の魂を注ぎ出し、咎ある者と共に数えられたからである。しかも、彼は多くの人の罪を負い、咎ある者のために執り成しをした。」(イザヤ53:3-12)

こんなことは人の思いから出てこないと思います。預言者の中に神の霊が働きかけて、こういうことを書かしめられた。それが残されて、イエスがこれをお読みになって、これは自分のことを預言した言葉だと深く受けとめられた。そして、十字架におかかりなつた。十字架に架かつて人の(全人類の)過去・現在・未来のすべての罪(神に対する叛逆の罪)を負われ、人間を根底から救いあげた義人(神の御心に従い切つた方)が、死のままで朽ち果てるなどということはあり得ない。その人は、忽然と、まばゆい霊体で現れた。これが、「復活」と言われている事態である。弟子たちは、このキリストに出会い、さらに五旬節(ペンテコステ)の日に聖霊の降臨に浴して、別人ときられて(新たに生まれて)、この復活されたキリストを伝えることに命を惜しまなかつた。使徒言行録(使徒行伝)は、その記録である。

最後の晩餐と言われている席において、イエスは弟子たちに約束された。

「<sup>18</sup>わたしは、あなたがたを捨てて孤児とはしない。あなたがたの所に帰つて来る。<sup>19</sup>もうしばらくしたら、世は、最早、わたしを見なくなるだろう。しかし、あなたがたは、わたしを見る。わたしが生きるので、あなたがたも生き



るからである。<sup>20</sup>その日には、わたしは、わたしの父に居り、あなたがたは、わたしに居り、また、わたしが、あなたがたに居ることが、わかるであろう。

<sup>21</sup>わたしの戒めを心に抱いてこれを守る者は、わたしを愛する者である。わたしを愛する者は、わたしの父に愛されるであろう。わたしもその人を愛し、

その人に私自身を現わすであろう。」(ヨハネ14・18〜21)》

このヨハネ伝の

「わたしはあなたがたを捨てて孤児<sup>みなしご</sup>とはしない」

というところが大事です。13章は、「弟子の足を洗う」という場面ですね。それから14章から16章までがいわゆる「訣別遺訓」といわれていて、イエスが弟子たちに懇々と自分が亡きあとのことについて論<sup>まこと</sup>された。17章は最後の祈り、神さまに対してご自分のことを祈られ、また遺<sup>のこ</sup>る弟子たちのことを祈られ、また弟子たちを通して福音にあずかっていく者たちのことも祈られたのが17章です。ヨハネ伝のこの13章から17章は素晴らしいところです。伝道そのものの記事は12章で終わっています。そういう位置づけになりますが、この14章のところで、

「私はあなた方の所へ帰ってくるよ」

と言われた。それは復活されたキリストはもちろん弟子たちの中に現れられた。それだけではない。その復活されたキリストはあの時にいなくなる。けれども、見えないキリストが、まるで見えるかのごとく、脈々と弟子たちの身体<sup>からだ</sup>の中に、霊そのものの中に、密着して一つとなって、そして地上でなされた御業<sup>みわざ</sup>の続編をなされた。これが「使徒行伝」なんです。あの14章の中でキリストは、

「あなた方は私がしたよりもっと大いなる業<sup>わざ</sup>をなす」

ということを言っておられる。キリストが地上でなされた業、「大いなる業」とは何だろうか。これは復活されたキリストが弟子たちと一つになって、永遠の生命を分かち与えていくというわざです。

地上でのキリストがなされたのは所詮、ラザロにしても元の身体に戻っただけで、永遠の生命は来なかった。どんなに病が癒され、どんな奇蹟にでつくわたした人たちも、どんなに五千人の人がパンでお腹がいっぱいになっても、それまでです。結局、地上のことで終わっています。イエスが地上でなしたさまざまな奇蹟の御業はやがて展開されるだろう——窮極的には天界において、天の世界において——あるいは新天新地の到来<sup>あかつき</sup>の暁に成就することをあらかじめ示されたのです。

少なくとも地上において今度は、イエスが弟子たちと一つになって、延長戦をやっている。続編をやっつけられる。これが本当のイエスの働き、復活されたのちのイエスの働き、これが使徒行伝に書かれた素晴らしい記事ですよ。あれを読んだらもう感動しますね。あのペテロは、イエスが十字架につけられるその前の晩なんて、ブルブル震えていたで



はないですか。女中さんが、

「あんたはあの人と一緒にやろ、なまりでわかるよ」

「違う、違う、違う。そんなもの知らん、知らん、知らん」

と言ったら、鶏が鳴いたとありますね。イエスはペテロに、

「お前は、鶏が鳴く前に、二度私を知らないと言う」

「いえ、絶対そんなことはありません。こいつら(他の弟子ども)はそんなことがあっても、私にかぎってはそんなことはない!」

と胸を張って言った。そのペテロがもうブルブルふるえて、

「あんな人は知らん」

と言ってしまった。イエスはそのペテロをじつと見ておられた。それで

「ペテロはさめざめと泣いた」

と書いてある。別れの前にイエスはペテロに言っておられます、

「今晚みんなけちらかされてしまう。私はお前のために祈った。お前がまた立ち直った時には他の弟子たちを力づけてやってほしい。そのために私はお前のために特別に祈ったよ」

ということをキリストは言っておられる。だからもう、イエスにとってはみんなお見通しなんです。そのとおりになっていた。ペテロとしてはこれはやりきれなかったでしょうね。だから、聖霊を受けたペテロはもう殉教を恐れない。弟子たちはみんな殉教を恐れませんでした。伝説によると、

「ペテロは逆さ十字架にかけられて殉教していった」

とか言われます。この地上の命なんて全然問題にしてない。もうイエスという火が燃え移って、火が付いてしまったから、これは前に進まざるをえない。

使徒行伝3章にあります、「美しの門」という所で乞食が坐って物乞いをしていた。ペテロはその物乞いに言いました、

「金銀は我になし。お金は持っていない。けれども、私が持っているものがあ

る。イエス・キリストの名だ。このイエス・キリストの名によって歩め!」

と言って、手を取って起き上がらせたら、即座に、今まで動かなかった足が健やかにされて、跳びはねて喜んだ。みんなはそれを見ましたから大騒ぎになった。それで、「これは大変だ」と、サドカイ人やパリサイ人は、自分たちが十字架につけて殺したイエスの弟子がこんなことをやってのけたら、自分たちの立つ瀬がない。だから、さんざん彼らを鞭打って、

「絶対にもうイエスの名によってしゃべってはいかん」

と脅したら、

「神に聴くよりも汝らに聴くは、神の御前に正しいか、汝らこれを審け」

と、聞き直っていますよ。ペテロは。かつこいいですよ。そういうのが出ている。使徒行



伝を読んでくださいね。本当に素晴らしいから。

あるときは、パウロがルデヤという女性に話をして——あのピリピの教会の始まりです——紫布を商う商人の裕福な奥さんのルデヤという女性に聖言を語っていた(使徒16・14)。いく日もいく日もそこで語っていた。そしたら、道すがら奴隷の女がついて来て、いろんなことを言う。これに変な霊がついているわけです——その女奴隷がいわゆる占いをすることによって儲けている主人がいた——それがあまりにうるさいので、

「キリストの名によって出て行け！」

と言って、霊を追い出したら、その奴隷女は健やかになった。そしたら、その主人は、

「商売道具を壊してくれたな、責任をとれ！」

と、彼らをさんざん鞭打って獄へ放りこんだ。奴隷というのは物扱いですから、奴隷によって儲けているのに、その奴隷がいうことをきかなくなったら、機械が壊れたのと同じです。それを弁償しろと、牢屋に放りこんだ。そしたら、パウロとシラスが夜中に神を讚美していたら——他の囚人はみんなそれをし——んと聞いていた——突然地震が起きて、鎖が全部ほどけて、獄の戸がみな開いた。獄の番人たちは囚人がみな逃げたと思って、責任をとって自害しようとしたら、パウロは、

「やめなさい。誰も逃げてはおらんよ」

と。獄卒はびつくりして、パウロとシラスは神さまのような人だといって、打ち傷を洗って、自分の家に連れて行って、

「私たちが救われるにはどうしたらいいですか？」

「イエスを信じなさい。そうすれば、あなたとあなたの家族も救われます」

と言った。すると、彼らは

「直ちにその晩にバプテスマを受けた」

とある。「洗礼、バプテスマ」というのは、昔の人にとっては「信ずる」ということと一つなんです。口で信ずるのではない。「信ずる」ということを「バプテスマを受ける」という形で表した。

だから、「信ずる」というのは、何日か聖書を勉強して、「公教要理」を勉強して、それで合格証書をもらって、「さあ洗礼をしましょう」なんてやってない。昔は、「信ずる」ということは、形で表わさないとね、昔はすべて形で表します。取引だつて何だつてそうなんです。土地の場合でいうと、土地を表すシンボルを引き渡す。シンボルとして槍とか刀とか、そういうった象徴的な物を引き渡すことによって支配を移すということを目に明らかにする。そういうように、「信ずる」というのは、「バプテスマを受ける」という形で告白したということです。

〔註：公教要理とはカトリックで洗礼志願者や子どもたちにキリスト教信仰を教えるための教材。プロテスタントでは教理問答ともいう〕





とにかく、あの使徒行伝のペテロを読んだら爽快ですよ。もう心がおどる。そういう感じが私はします。キリストが弟子たちへ乗り移って、御業をなさった。これは私たちにおいても同じなんです。私たちにおいてもちつとも変わりません。あれは昔だけのことで、今と関係ないなら、こんなことを勉強したって何の意味もない。

「あそこで書かれていることは、質的には今も現在どこでも、本当ですよ」と。神さまの世界というものは地球を全部包んでいますから。そして、別次元から語りかけているわけですよ。それだから、古今東西どこであろうと、神の聖言は永遠なんです。

「キリストは今も生きて働いておられる」

と。だから、我々は本気で、

「主よ、主さま、イエスさまー！」

と祈れば、パッと応えてくださる。そういうお方なんです。

そして、ひとことだけ最後に付け加えておきます。いったい、神さまはどんな人間を相手にしてくださるのか。「自分は立派だ」と思っている人には、キリストは用がない。

「自分は真暗だ、自分は罪深い、自分は弱い、自分はこのままでは滅びだ」

と、そういった脛に傷のある者、自分に病を負っている者、自分の中に光を見いだせない者。しかし、

「光がほしい、生命がほしい、お助けください！」

という叫びを心に抱いている者、それをちゃんと見分けて、ご自身を現してください。それをここに書きました。

《神・キリストが相手にしてくださいるのは、いわゆる「義人」（自分は正しい、神にすがったり、救いを求めたりする必要は存しない、と自認している人）ではなく、「病人」（心に傷を持っている人、神の憐れみ、救い、護りがなければ生きていけない、と自覚している人）である。

「<sup>12</sup> 健やかな人には医者是要らない。要るのは病人である。<sup>13</sup> 『わたしが好むのは憐れみであつて、犠牲ではない』（ホセア書）とはどういう意味か学んで来なさい。わたしが来たのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである。」

（マタイ9・12～13）

と。これはマタイが召しを受けた時に、マタイは取税人でした。やはり取税人は辛かったですね。とにかく、たくさん取り立ててピンハネをして、それで自分の懐をこやしているから、みんなからのすぐく嫌われていた。ローマの手先だと言われて。だから、いやでしょうがない。その時にそのマタイの心を読みとつてキリストは、

「私について来なさい！」

と呼ばれた。そして、マタイは自分の仲間たちとお別れの宴を開いた。その宴席にいろんな取税人とか、他の「罪びと」と言われている人とか、遊女とか、そのような人がやつ



てきた。そしたら、パリサイ人は、

「お前たちの先生は何だ。その周りまわにいるのは汚い連中、汚けがらしい連中だ」と言つて騒いだそうです。それに対してイエスはこう仰つた、

「健やかな人には医者是要らない。要るのは病人だ」

「あなた方は自分を義人だと思つている。自分は健やかだと思つている。本当にそうかね、あなた方こそ本当に救いを必要としていないのかね」

ということ、逆に言つておられる。だから、

「わたしが来たのは、あなた方のような義人のためではない。罪びとだという自覚をもつて救いを必要としている人を私は招くために来たのだよ」

「だいたい、罪はどうしてくれるんですか？」

「私が全部背負つたからね」

と。この保証なんです。あの姦淫の現場で捕らえられた女性が、朝、突き出されて来た。その時に、

「先生、モーセは、姦淫の現場で捕らえられた者を石で殺せと命じています。

先生はモーセを否定しないでしょ、どうなさいますか？」

と。そしたら、イエスは黙つてかがみこんで、地面に何かものを書いていた。

「どうなんですか！」

とあまりにもしつこく言うので、イエスは立ち上がつて、

「では、お前たちの中で石を投げうつ資格のある者は石を打て」

と言つて、またしゃがみこんだ。そしたら、「年寄りから一人ずつ去つて行つた」という。つまり年寄りがそれだけ罪深い（笑）。年齢を重ねるごとに罪が重なつていく。だから、イエスにそう言われたら、誰ひとり石を打てなかつた。最後にその女性だけが残つた。

「ああ、誰もいないのか？」

「はい、誰もごいません」

「私もあなたを罪しない。もう罪を犯さないように」

と言われた。しかし、それは無条件の赦しですけれども、

「あなたの罪を私が背負つたからね。ちゃんとおとしまいはつけるよ」

と、そう言つておられる。仏教は「大慈大悲」です。「ああ、よしよし」と、誰でも全部救われます、お釈迦さんの手によつて。それも素晴らしいかもしれない。けれども、キリストの方はもつとリアルです。本当に自分の身体でもつて、全存在でもつて、十字架でもつて、それを全部背負いこんだ。お釈迦さん自身も、キリストによつて救われているはずですよ。ご自分の救いの悟りを開かれたかは知らないけれども。

本当に全人類の古今東西、全部を背負いこんだ。それが十字架です。だから、十字架は凄。十字架の有り難さ、凄さ、それを本当にわかつていただきたい。その前に本当に首



を垂れてほしい。どんな人も十字架の前で全部救われていくんです。本当にそうなんです。私はそう信じております。だから、自分の側には何も誇るところはございません。

「あなたの望み、憐れみだけです」

と。もう時間も参りましたので、これでもって今日のお話を終わることにします。

### ●祈り

短くひとことお祈りいたします。しばらく黙祷をお願いいたします。

主イエス・キリストさま、またキリストの父なるおん神さま。今、聖霊というお姿での会場にご臨在くださる御霊の主さま、今日この時を与えてくださって感謝いたします。

春の訪れと共に、陽光がさんさんと降りそそぎ、野外では花がほころび、沿道に咲きほこつております。そういう良き時にあなたはこのあなたの聖言みことばという、生命いのちの真清水まをもつて私たちを潤し、豊かにしてくださいましたことを感謝いたします。どうか、今日初めてお聞きになった方も、また古くからあなたご自身と聖書に慣れ親しんでこられた方も、今一度、原点に戻って、

「本当にそうだ。自分たちもこの主イエスと共に歩もう。キリストと共に余生を生きよう。願わくば、迷っている人、悩んでいる人に、このイエスの生命の言葉を伝え、共に神を讃美する生涯を送ろう。将来の希望を持ってないお年寄りの方々に、本当の希望とはこれだということ伝えていこう」

と。どうぞ、そういう思いをお与えくださいまして、あなたが共に働いてくださるよう、希望こいねがを奉ります。この講演会のためにいろいろ労してくださいました奈良召団の方々に感謝いたします。また、ここに足を運ぼうとして運びえなかつた方の上にもあなたのおん祝福が臨みますように。主イエス・キリストの尊みき御名を通してこの感謝と讃美と祈りをみ前にお献けんげいたします。アーメン。

